

諸所抜砂糖取締心得候覚：本文と解説

著者	先田 光演
雑誌名	沖縄文化研究
巻	10
ページ	133-152
発行年	1982-10-20
URL	http://hdl.handle.net/10114/00015591

諸所拔砂糖取締心得候覺——本文と解説

先田光演

〔本文〕

上之関下之関並天草肥後肥前表諸所江拔砂糖並唐物締として被差出候ニ付 心得候儀共左之通達置候

一、何方ニ而茂琉球嶋々登船掛落候ハハ直ニ乗付致見分 嶋許出帆之成行風並等之儀共細々相糺 取締向之儀船頭並乗組中江も厳敷申渡 積荷相改縄張致封印 昼夜付役乗せ付置 船中之者共無故陸卸不為致 勿論滞船之旅人地方之男女乗せ付候儀屹と差留置 夜入候ハハ忍廻等いたし 其外形行次第見計を以万端無手拔可致取締 勿論船痛所等候ハハ 早々為取繕順風次第山川江可為差

廻 尤山川出張砂糖方御代官並砂糖締見聞役津口番所詰見聞役江送状可差遣 依時宜者付役乗付可差遣候

一、御国商売船致入津候ハハ 直ニ乗付積荷手形等見届細々可致改方候 尤御国船数艘入込候節者夜中ニ茂密々付役忍廻為致 又者直差廻無手拔可致取締事

一、御仕登砂糖積船致入津候ハハ直ニ船頭招呼 山川出帆方中途滞船之儀共細々承届 上乘茂有之事候得共 猶又拔荷等取締向可申渡 湊ニ依ては順風有之候而茂態と致滞船事茂有之由候間 一切無故障滞船不為致順風相立候ハハ差急キ出帆可為致 其外不依何品御用物積船之儀者同断可相心得事

一、何方ニ而茂 拔砂糖見届候ハハ 直ニ船頭其外船中之者共細々致糺方 屹と帰国申渡其段可申越候 左候而取揚砂糖者其湊江致汐掛居候御国船之内船頭人柄等見会 都而積移屹と縄張致封印中途之取締申渡山川江可差廻 尤出張役々江成行之送状差遣候儀共 前条乗落船同様可相心得 万一御国船不参会候ハハ其所方船借入 船頭人柄彼是委敷致吟味証文等為差出 中途不締無之候様取計 右同断可差廻候

右ニ付下之関之儀者同様之仕向ニ而大坂江可差廻 其節者大坂御留主居江宛送状可差遣候事

一、同断之節御国船不致入津 借入儀も不相調候ハハ 其所之役人江断置得と焼捨ニ可致 若又依所其儀故障も候ハハ 樽面解崩し海中江可相沈候 纔迎茂其所ニ而入札払亦者相对致払方候儀 屹と

不相成筋可相心得事

一、御仕登砂糖積船請込方限^ニ而及難破船其船不用立節^者 他国船借入山川亦^者大坂江差廻候儀共時

宜次第可取計 若亦積替船急速用意調兼候ハハ 下之関ハ大坂 肥後肥前方限リ御当地江可申

越 別段御吟味可有之候 往返之間其所土藏借入堅固致格護置 何様之故障有之候共 入礼払等

之取扱屹と不相成儀共前文通可相心得候 右様難破船^ニ付而者依時宜長崎亦ハ大坂詰^ル為差引致出

役儀^茂可有之候得共 請込方限リ則差越無手扱可致差引 右通別段差引人致出役候ハハ何篇申談

取扱可致候 浮沈荷物部壹渡方之儀 是迄^者其品入礼等いたし致配当事候得共 前文通其所^ニ而砂

糖取扱不相成候^ニ付而者其所役人立会見分之上其位^ニ応し直段見賦 其金高長崎亦^者大坂江致掛合

取寄候而御法之通可相渡 其品日延^ニも可相成候得共宜申取置右之通取計候 大坂長崎^ル別段差

引人被差出候ハハ 配当金子用意も可有之候条申談 時宜次第可取計候

一、前条御仕登砂糖亦^者取揚砂糖御当地大坂江積廻り儀^ニ付候ハハ(朱書「二、山川^ル大坂迄里数何程候

哉」山川^ル大坂迄百斤^ニ付三兩六分五^リ被成下候^ニ付 其里数之割を以相渡候儀共其節之時宜次

第可取計候 右運漕賃纜之員数候ハハ用心銀^ル可相渡候 過分^ニ及候ハハ御国許又^者大坂江積届候

上渡方有之節可取計置候

一、抜砂糖いたし候者共^者至極隱密之可致取扱事候間 精々細密氣を付可致見聞候 右^ニ付召仕候

足輕共^者勿論船頭水主又^者其上地之者^ニ而も見計を以内意申含可召仕候 左候而勤勞之依浅深夫々

御褒美可有候　心掛宜拔砂糖見当致注進候者共ハ　其斤高半方ツツ可被成下候間其段可申論置
左候而他所者致訴人候ハハ　長崎御附人江致掛会其斤高応シ候金子取寄可相渡候　尤其形行細々
申出相渡候受取書等可差出事

右之通可相心得　左候而差越候上銘々請持候湊ニ致廻船取締之手数相洩候儀者得と致勘考　形行次第無手抜可致取締候　最寄之湊数其所之人舩船々入津之多少　御国砂糖抜口之次第　細々致見聞罷帰候上可申出事

一、上之関

右御領内西目東目双方海路肝要成津口ニ而就中御国東目通船者　右湊江致汐掛申候間　唐物並拔砂糖其外抜荷入念可致取締候　左候而𦵏人者上之関不明様罷在　𦵏人ハ下之関迄相掛津々浦々致廻船無手抜取締可有之候

右諸国上下之船々致出入御国船茂不断致汐掛居　拔砂糖者　勿論唐物取締肝要之場所ニ候間万端氣を付可致取締候

平戸領

一、田助湊

右湊諸国上下之船々致汐掛　御国船茂数艘入込申候間　船中不正之品取扱候儀難計候ニ付氣を付致取締　平戸城下江茂折々御国船入込砂糖商売いたし候由　且又田助湊方北ニ当り海上三里計

相隔候同平戸領内大嶋之同神之浦湊江依風並田助湊走通候船々致汐掛 此所_レ順風相立唐津領呼子湊又_レ者下之関迄差越候由 右湊ニ而も滞船之旅人江拔売いたし候儀も難計候間 折々此湊又_レ者右呼子湊同所片嶋之間江茂致廻船可致取締 右場所之儀御国商船入込砂糖致商売此所_レ唐津城下辺江茂左之通候哉ニ相聞得候事

一、右通請持ニ而耆人ハ田助不明様罷在、耆人ハ請持又_レ者筑前浦々迄も致廻船 砂糖唐物等拔荷精々可致取締候

右外(虫損)見合筑前浦々迄茂致廻船砂糖抜口可致見聞事

右湊ニ者田助詰_ル請持ニ而可致取締候

肥前大村領

一、松嶋

右湊御国船数多致汐掛他所船茂同断ニ而賑候場所相聞得候付精々可致取締 尤嶋々乗落船差越滞船之旅人又_レ者大村城下_ル商人入込拔砂糖買入候聞得茂有之候事

右同

一、嶋戸 柿之浦

右両所船々致入津候場所ニ而近年御国船数多入込 五嶋江乗行候差口之湊ニ而五嶋之商船段々差越同所之産物と三嶋砂糖商売致候哉相聞得候事

右同

一、瀬戸浦 板之浦

右両所茂御国船致汐掛候段相聞得候事

右同

一、面高

右手広キ湊ニ而御国船上下之節風並次第致汐掛 間ニ者此所大村城下之商人と致掛引致拔砂糖之聞得有之候事

右同

一、七竈 京泊浦 三重浦

右湊々松嶋詰方請持ニ而可致取締事

一、五嶋

右之内船々入津之湊数多有之 間ニ者嶋々乗落船茂差越候由候間氣を付可致取締 崎戸・柿之浦其外最寄之湊江茂致廻船 松嶋詰同役申談可致取締事

右五嶋詰方請持

長崎支配地

一、杣嶋 佐賀領

右場所御国般諸壳船入込同所諸船問屋いたし候者 砂糖者勿論材木椎皮類壳捌方引請致世話 長崎表都合取計呉 礼錢等貰請候由 御国船不正之致商壳候者右問屋を便り差越候由相聞得候事

長崎支配地

(長崎支配地)

一、野母

佐賀領
脇津

大村領
福田浦

右樺嶋詰請持ニ而可致取締

天草之内

一、牛深湊

右外場所と相替 御国船入津繁々嶋々乗落数艘差越候場所ニ而地方之者共透すきを計砂糖買入長崎辺江相廻候聞得有之候間 乗落船差越候ハハ前条振合を以無手拔可致取締候 引続右船入津之湊段々有之候付折々可致廻船候 乗落船数艘差越取締行届兼候ハハ 長崎江申越見計を以所横目又者無役郷士共招呼付役之場ニ而取締為致候儀共時宜次第可取計候 難破船等ニ而及混雜候節も同断可相心得事

右牛深崎之津詰請持

一、高橋 小嶋 清源寺 川尻 八代 高瀬川筋

肥前

一、嶋原領之内湊

右高橋者熊本江流通候川筋ニ而人家茂多問屋等富家之者共ニ而御国船等多入津之場所 右川下小嶋之儀も同断 且嶋原領之内湊江も船々入込由 右三ヶ所を本といたし諸浦廻船無油断取締可致事

一、筑後大川筋

右最寄之浦々江も御国船差越諸品米大豆等致交易由 行廻無手拔可致取締事

一、拔砂糖之儀ニ付船頭又者商人共至極隱密之致取扱筈候間 精々氣を付可致見聞候 右ニ付附役者勿論其所之者茂人柄見合内意申含置可召仕候 心掛宜拔砂糖見当致訴人候者江も自他国之者無差別其斤高半方代銀を以可被下候間 其段申論置右躰之者者筋々江可申出事

一、三嶋砂糖惣買入ニ付而者段々被及御吟味 第一大坂表響合彼是ニ付 拔砂糖御取締向敵敷被仰出御領内者勿論他領遠境迄も御出方等之不及御沙汰 多人数被差出事候間彌其旨を汲請其詮相立候様心掛取締向無油断可致精勤候 右ニ付取扱振心得之儀共別紙之通申渡置候事

不案内之儀共得差図候而者間緩ニ茂可及候間 形行次第得と致勘考時宜相当之可致取扱 尤爰許ニ而得差図候儀共ハ其通ニ而何篇行届候様可相心得候 其身之嗜ハ勿論付役又者乗船之船頭共酒宴等ニ酖り候而者夫丈不行届儀茂可有之候条 万事心を用御外聞ニ相掛候儀共無之様 屹と取締可致候聊大形有之間敷候

一、此節拔砂糖為取締致出役候ニ付 万一御仕登米積船難破船等ニ而濡俵等ニ相成候節者其所ニ而入札払可申渡事ニ候 右様之節者其所之者共申談入札直格別下落之向成立候者案中ニ候間 精々相働少

ニ而も直段相近候様可取計候 入札一件之仕向其所之役人共仕来杯と六ヶ敷申立候ハハ 出張役人江致面談 主人参勤ニ付而之用米ニ候処ヶ様成逢災殃及差支事候間 所之者共其旨を汲請少々ニ而も直段相進候処 相含入札呉候様御取計給度趣ニ而無勘可頼入候 夫迎茂不相当ニ致入札候ハハ 其所之入札取止メ参合候御国船ニ積移付役乗せ付長崎江相廻御附人江其趣細々可申越候 依時宜御当地江差廻其段可申出候 若又御国船不参合候ハハ他所之船借入可差廻候 不相調候ハハ前文之振合ニ而入札直段相進筋可取計候 其湊滞船之旅人等能相手茂候ハハ 相对直段次第者 売払又者可為致入札候 国法ニ而不相成儀色々六ヶ敷申立候ハハ 其場出役之者ハ国法ニ而不相趣屹と一札為差出可持越候 浮沈部老渡方ニ付而者 浦御高札之振合ニ応し無手抜可致取扱候 何篇不及御損失儀を肝要ニ可存 此節平戸領内ニ而御仕登米積船破損いたし 濡米入札払付彼之所之者共利勝之致取扱直段不相当致下落 猶又御損失ニおよひたる事候間 以来彼是心を用精々可相働事

一、抜紙御取締売ニ付而者分而申渡置趣茂有之候処 於諸所漉調候雜紙 長崎天草辺其外他領表江致候哉ニ相聞得候ニ付 他領表滞在中出入船之大小ニよらす 自然無印紙致所持候者 唐物抜砂糖同様右紙取揚申付候 左候而附足輕者勿論依時宜者手先江召仕候者無印紙見当候節ハ 爰許訴人同様右紙代銀都而可被成下候 右ニ付而者取揚紙御当地江不及差廻 再重抜紙ニ不紛様束毎ニ見聞役致印形 於其場入札申渡売代錢訴人之者江茂可相渡候 尤上陸之節者成丈店屋等氣を付 御国製之無印紙相見得候ハハ 御国売人精々聞糺名前相知候上形行届申越 於爰許雜紙方掛見聞役方尚又当人

糺方之上 右壳代錢取揚候上便宜を以訴人之者江者可被成下候 左候而右形行之書付右訴人江相渡
置候様申付候条 右之趣兼而申諭置屹と取締行届候様他領表唐物締拔砂糖締亦者拔米取締江可申渡
事

右之通亥正月十一日但馬殿より平川市左衛門御取次を以被仰渡候事

御廻文写

九州筋の中国迄唐物其外拔物為取締 横目並付役被差遣請込方限時々致廻船無手拔致取締候様ニと
之儀者追々申渡事候処 間ニ者湊長滞船いたし右者其所の響合茂有之不可然事ニ候 且苦船ニ而酒食等
取はやし候聞得も有之 或者御仕登砂糖積船等江不法之出申掛 船々致難渋候哉之風聞茂有之 右等
之儀者付役以下之者共心得通ニ而可有之哉 是迄之儀者夫形ニ而不及沙汰候得共 向後其身形状者勿
論彼は無手拔行届致取締 付役亦者船上之者共江手堅謹慎筋可申聞候 乍此上聞得之趣茂候ハハ第一
御外分ニ茂相掛事候ニ付 屹と可及沙汰候条万端得其意可致取締旨 他領唐物締横目中江可申渡候

天保十二年丑年

正月

主 水

一、他領唐物並拔砂糖取締等被仰付被差出候横目共事 是迄依人者向田乗船後御領内浦々沙掛之

節 外御奉公人同様心得違致陸宿又者同役共寄合 無故酒食取企候者茂有之候段相聞得 旁以不可然事候間 向後右躰之儀無之様屹と相心得早々請持之場所江差越 無手抜可致取締事
天保十五辰正月

〔解説〕

この文書は、鹿児島県曾於郡志布志町誌編纂室所蔵の宮ヶ原家文書の一つである。原本は表紙に「安政六年未如月写 難破船＝付部一渡方其外心得諸書付 宮ヶ原蔵」と墨書された九十二枚綴りの堅張である。

奥書には「此一冊日州表唐物締横目谷山恕兵衛殿当所御滞在之折致恩借写取置候事 安政六年未如月 宮ヶ原喜兵衛蔵」とある。

本文には特に項目名は記されていないが、その内容から次の三つに分類することができる。

一、難破船の荷物の取扱方（沈荷物は十分の一、浮荷物は二十分の一を救助に当った浦人へ渡すこと等についての文化四年の通達他、前後十六枚。この文書で難破船の荷物の陸揚料を「部一」と定規している）

二、諸所抜砂糖取締心得候覚他（九枚、本文書）

三、難破船の記録（大坂より帰帆中の恵室丸が、小倉領藍島の白洲に座礁して難破した時の記録が詳しく六十枚に誌されている。他に大坂仕登米を積んだ興行丸の難破記録六枚）

ここに収録した「諸所抜砂糖取締心得候覚」は天保十年（一八三九）正月十一日に家老島津但馬久風より平川市左衛門の取次によって出された覚書である。

この他に天保十二年正月の「御廻文写」と同十五年正月の通達を関連文書として収録した。

これらの文書は前書の通り、上之関・下之関や九州西海岸の天草・肥前・肥後の各浦に派遣されている薩摩藩の抜砂糖・唐物取締役へ出された心得である。

九州西海を航行して大坂へ登る航路を西目海路といい、上之関は西目海路と日向灘を廻る東目海路が合流する重要な地点であった。薩摩藩はこの上之関までの西目海路の要所に詰役人を配置し、抜砂糖を厳しく監視し摘発していたのである。

この文書によって奄美の三島惣買入制の砂糖は、厳重な監視体制の下で大坂まで輸送されていたことがわかる。

次に通達の要旨をまとめてみよう。

1、琉球の島々からの登船が漂着して来た時は航行の様子を詳細に糾し、積荷には縄を張り封印をして昼夜共監視を行うこと。

破損していた時には早々修繕を行い順風次第山川港へ廻送させよ。

2、国船（薩摩藩船）が商売のため入津した時は直ちに乗付け、積荷手形を詳細に検査すること。

3、仕登砂糖積船が入津した時は、船頭より山川出帆後の様子を詳細に聞糾し、抜荷の取締心得に

ついで申渡して順風次第差急ぎ出帆させること。

4、抜砂糖を発見した時は直ちに船頭や水主を厳しく糾明し帰国させること。

取り揚げた砂糖は他の国船に積み移して縄を張り封印して山川へ差廻し、国船がない時はその地で船を借入れ、船頭の人柄を吟味して証文をとり廻船させよ。

下之関の場合は大坂へ差廻すこと。

5、国船も借船もない時は、その地の役人に断り全てを焼捨てよ。もし、焼却できない時は砂糖樽を解崩して海中へ投棄すること。決してその地で入札してはならない。

6、仕登砂糖積船が請込方限で難破した時は、他国船を借入れても山川か大坂へ廻送すること。もし、積替船が用意出来ない時は下之関は大坂へ、肥前・肥後は鹿児島へ連絡すること。その間砂糖は土蔵を借りて格護し入札してはならない。

救助に当った浦人には部一を渡すこと。これまでは積荷を入札してその代金の中から沈荷に対しては十分の一、浮荷については二十分の一の部一を支払っていたが、前文の通り入札が禁止されたので、役人の立会のもとで直段を見積らせて部一の金高を長崎や大坂から取り寄せて支払うこと。

7、難破船の砂糖や抜荷発覚の砂糖を大坂へ輸送する時は、山川より大坂まで百斤に付き三两六分五厘の運送賃を支払うこと。量が少ない時は用心銀より支払い、多量の時は到着払いとする。

8、拔砂糖をする者共は至極隱密に取引を行うので、よく氣をつけて内偵せよ。

足輕はもちろん船頭・水主やその地の者へも協力を求め、各々の勤務成績によって褒美を与える。

拔砂糖を発見し注進した者にはその砂糖の半分を与え、他国人が訴えた時には長崎の附役人にかけあい砂糖の斤高に応じた金子を渡すこと。

以上の通り心得て手抜きなく取締を厳重に行うこと。

最寄の湊数やその地の人跡・船の入津の多少・砂糖抜口の次第等についても詳細に調査し報告すること。

以上のように八ヶ条にわたって拔砂糖取締の心得等が細部に至るまで通達されている。さらに、この後に西目海路の各港についての注意事項が続ぎ、具体的な取締が指示されている。

次に各港の注意事項の要旨をまとめ、これらの港を地図上で確かめてみよう。

上之関 西目東目双方の海路として重要な港である。特に東目通の船はこの地に必ず汐掛するので、唐物、拔砂糖、其外抜荷の取締は入念に行うこと。

詰役人のうち一人は上之関を不在にしないようにし、一人は下之関までの津々浦々を見廻ること。

田助湊 平戸領のこの湊は諸国の上下船が汐掛し、国船も数艘入港するため不正の品の取扱も行わ

れがちである。また、平戸城下へも時々、国船が入港して砂糖商売をしているとのこと。

風向によっては北へ三里隔てた大島の神之浦へ入港し、順風次第呼子や下之関へ出港する由。

この港でも滞船中の旅人へ拔売を行うおそれがあるので、折々田助港・呼子・片島の間も見廻ること。

田助詰のうち一人は田助港を不在にしないようにし、他の一人は筑前の浦々迄も見廻り砂糖・唐物の抜荷を取締まれ。

松島 肥前大村領の松島は国船の汐掛が多く、他船も同断にて賑かな港である。滞船中の旅人や大村城下より商人が入込み抜砂糖を買入れているという。(ここにも詰役人を置いている)

島戸・柿之浦 近年国船の入港も多く、五島へ乗行く差口の港であり、五島商船が来て三島砂糖と同島産物を商売しているという。

瀬戸浦・板之浦 ここにも国船が汐掛するという。

面高 手広き港のため風波によっては国船の汐掛もあり、大村城下の商人と抜砂糖の売買が行われているという。

七竈・京泊浦・三重浦 これらの港は松島詰が取締ること。

五島 この島には多くの湊があり、乗落船も来るとのこと。よく気をつけて取締れ。五島詰の請持
杣島 長崎支配地。この場所も国船や諸売船が入港し、ここの船問屋は砂糖はもちろん材木・椎皮

類まで売捌方を世話して、長崎商人より礼錢を貰っているとのこと。

国船も不正の商売をしようとする者は、この島の船問屋をたよって入港して来るといふ。(この島にも詰役人を置く)

野母・脇津・福田浦 この地は樺島(桃島)詰の請持にて取締ること。

なお、野母崎には、幕府の遠見番所が置かれている。

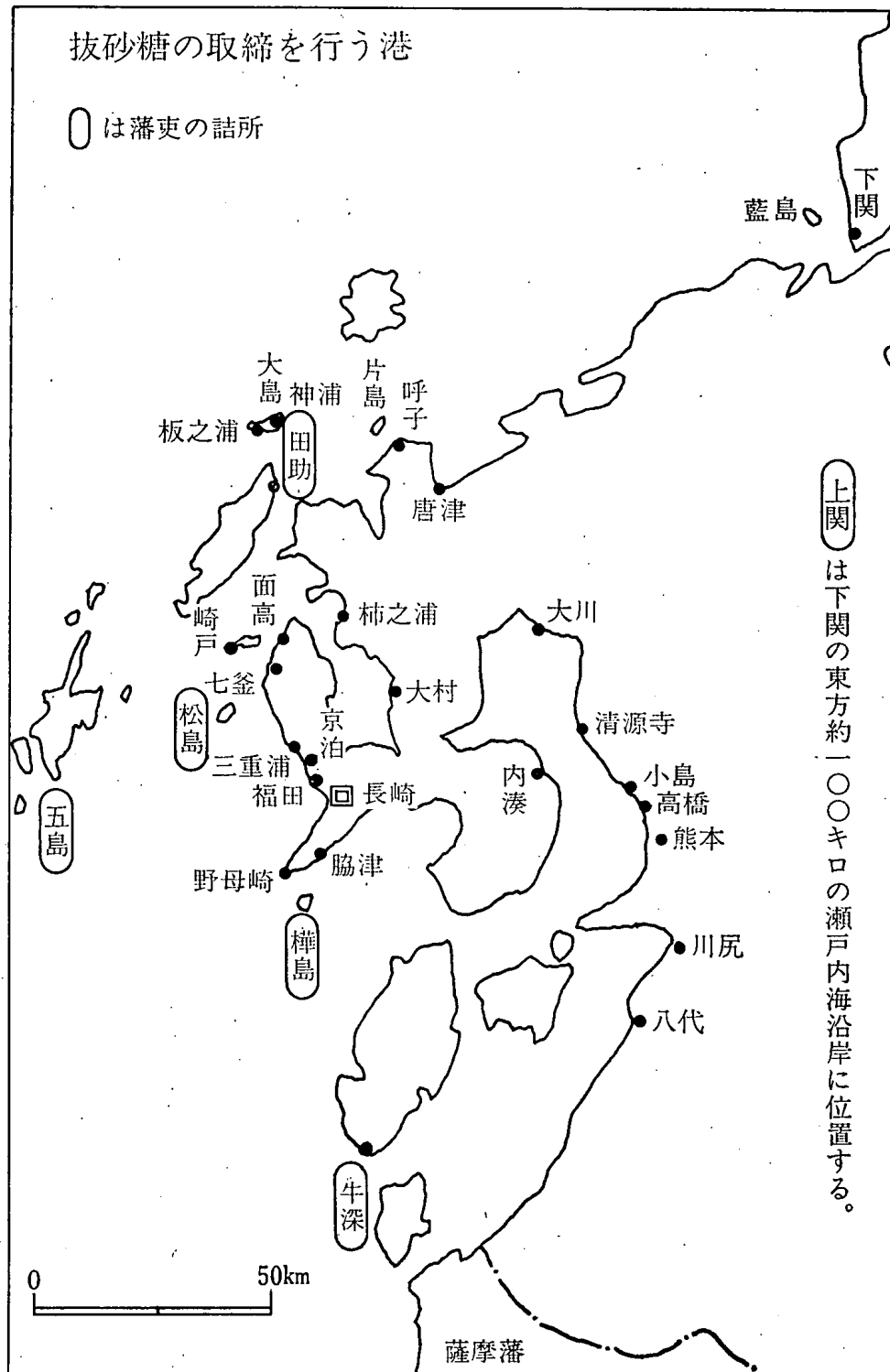
牛深 国船の入港の多い港である。乗落船が数艘やって来るため、地方の者共がすきをみて砂糖を買入れ、長崎へ送っているとのこと。乗落船が来る時は手抜きなく取締まれ、数船来て取締が行届かない時は、長崎へ届けて横目等と呼ばせて取締を行うこと。牛深崎之津詰の請持。

高橋・小島・清源寺・川尻・八代・高瀬川筋

島原内湊 高橋は熊本へ流れる川筋にあり、人家も多く問屋があり、国船の入港も多い。小島・内湊も同じ。この三港を本に諸浦への取締もおこなわないこと。

筑後大川筋 この近くの浦々へも国船が来て諸品・米・大豆等の交易が行われているとのこと。手抜きなく取締まれ。

以上の記録を一読すると、薩摩藩が天保の改革で第一の産物としてあげた奄美三島の黒砂糖の重要性が、さらに一層実感できるであろう。また、領主封建制下の砂糖専売制の実態がどのようなものであったかも知ることができる。



特に砂糖の輸送経路とその監視体制が明確にされている。牛深・樺島・松島・五島・田助・上之関には薩摩藩士が派遣されて、抜砂糖の監視摘発に当たっていた。

この抜砂糖の取締は何の目的で行われたのであろうか。

摘発された抜砂糖は、他の国船に積み替えて山川や大坂へ運送させているが、船便がない時はすべて焼却するか海中投棄をせよと命じている。決してその地で入札してはならなかった。

また、難破船の砂糖の入札も禁止されるようになった。これらの処置は、後述するように大坂表で砂糖価格が下落しないように防止するための処置であった。ここに、三島惣買入制の利益をすべてに優先させていた薩摩藩の姿勢がうかがえるのである。

この後にさらに次の四ヶ条の通達が続き、第二条において抜砂糖取締の目的が明記されている。

1、前第八条と主旨は同じであるが、抜砂糖発見者には自他国の別なく、その抜砂糖の斤高の半方代銀を与えることと改められている。

2、抜砂糖が三島惣買入の砂糖の大坂表における価格に、悪影響を及ぼさぬよう抜砂糖の取締は厳重に行うこと。

3、抜砂糖取締役であっても、万一仕登米積船が難破し濡俵となった時は、その米を入札させ、少しでも高値で落札できるよう取計らうこと。

入札についてその地の役人からむつかしい申立が出た時は、出張役人と面談し、藩主の参勤交

替の用米であり、参勤に差支えないように少しでも高値で落札できるよう取計らってくれように頼み入ること。不当に安い時は入札を取止め、他の国船に積み移して長崎へ廻送せよ。

直段次第では滞船中の旅人に売捌いてもよい。とにかく損失を少なくすることが肝要である。

4、抜紙について（略）

宮ヶ原喜兵衛は「志布志諸家系図」によると文政六年四月生で、天保五年十一歳に家督を相続し、長じて竹木見廻・地頭横目・高究・横目・組頭を歴任している上級郷士であった。そして、明治初期の頃は志布志麓の士族の中でも十指に入る経済力を有している。

この宮ヶ原喜兵衛と「諸所抜砂糖取締心得候覚」の文書は直接的なつながりはない。奥書に誌されているように、日州表唐物締横目谷山恕兵衛から写しとったものである。

この文書によって西目海路における薩摩藩の抜荷取締はその大要を知ることができたが、同様な「心得覚」は東目海路にも瀬戸内海路にも通達されていたものと思われる。

日州表唐物締の在任は、東目海路の発着港としてきわめて重要な港であった志布志港と深い関連があったと思われる。さらに、中山宗五郎に代表される志布志浦町の密貿易（対幕府）にとっても東目海路は重要な役割を果たしたであろう。

今後はこの東目海路・瀬戸内海路に関する古文書の発掘を期待したい。これらは、奄美の砂糖と琉球の唐物交易の海運史にとっては欠くことの出来ない史料となるであろう。

このような観点からこの文書の公開を志布志町誌編集室に申し入れ、快諾を得ることができた。そして、この文書の解読には、財部中学校長田実勇先生の御指導を受けて、ここに発表することができたのである。

志布志町誌編集室と田実校長先生に紙面を借りて感謝申し上げたいと思う。